

- 日 時：2020年8月23日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「神の国のたとえ」
- 聖 書：マルコによる福音書第4章21節－41節
- 讃美歌：214「わが魂のひかり」364「いのちと愛に満つ」

お早うございます。

初めに、先週の主日礼拝について触れます。

私は、立川教会は、先週の主日礼拝で、良い意味で一つの大きな山場を迎えたと思います。

それは、私が招聘されてから4年の歳月を経て、5年目を迎えた今、立川教会とはどのような教会であるかを、皆さんが身をもって示されたことです。

つまり、立川教会とは、何よりも礼拝を第一に守る教会であるということです。

今日もそうですが、先週は、外は35度を超えるような猛暑日でした。

私は、あまりにも暑いので、多くの皆さんはご自宅で礼拝を守るのではないかと考えていましたし、それで良いと思っていました。ですから、普段より少ない15名前後の礼拝かなと考えていたのです。

ところが、実際は24名です。教会員のほとんど全ての方が出席していました。

驚くべきことでした。

ご承知のように、教会員の多くは私を含めて70を超え、80前後の方も少なくありません。又、皆さんしっかり健康には注意をされています。そうした中で、その上、熱中症の心配もあり、コロナの心配もある中で、それにもかかわらず、何故ほとんどの皆さんが礼拝に集われたのでしょうか。

それは、礼拝を守ることを神様が命ぜられており、その信仰に生きているからです。

誰にも強制された訳ではなく、自然に皆さん集まって来られました。あの猛暑の中をです。

神様は、第一の戒めを守ることに於いて、私たちに良しとして下さったのではないかと思います。でも、どうぞ、無理をされることのないよう、体調がすぐれない時は、各ご家庭で礼拝をお守り下さい。そして、健康が許す時は、ぜひ一緒に礼拝を守りたいと思います。

さて、今日は8月23日（日）8月も第4週です。

来週は中川さんの奨励なので、私が平和について直接語るのは今回をもって終わります。

お話ししたいことは幾つもありますが、その中で一つ、平和とは何かについて私が具体的に経験して考えたことをお話ししたいと思います。

それは、2003年、私が神学校の2年生の時の経験です。

どこの神学校も、夏になると夏期伝道実習と言うプログラムがあります。夏の間、約2週間、ある教会に派遣され、その教会の牧師から牧会の訓練を受けるプログラムです。教師となるための教育実習の神学校版と考えれば良いと思います。

ただ、私が学んだ日本聖書神学校は、特別に、夏期伝道実習に代えて、希望者にはフィリピンの現地で学ぶプログラムが設けられていました。私はすぐに応募しました。

さて、フィリピンを訪れた時のことです。プログラムは南の方のネグロス島で行われるのですが、飛行機はまずセブ島に着き、そこで一泊します。そして翌朝、フェリーで隣のネグロスに渡るようになっていました。

セブ島に着いた時は、もう夕暮れでした。夕食を終え、宿舎に向かう時にはすっかり夜になっていました。

一行は10人前後であったでしょうか？マイクロバスなどなく、私たち学生は小型トラックの荷台に乗って移動しました。トラックは狭い道をほとんどいっぱい占めながら、かなりのスピードを出し、私たちは激しく揺さぶられ、荷台から落ちないように手すりにしっかり掴まっていたように思います。道の両側に軒を並べる家々には明りが灯り、その軒をかすめるようにして走っていました。すぐ目と鼻の先に次々と家が現れては消えて行きました。その時です、暗がりの中から家々の中に浮かび上がる明りを見るときもなく眺めていた私の心の中に、突然ある思いが浮かびました。

あの家も、この家も、明りの下では家族が集まって団欒の時を過ごしている。

その平和を、安らぎの時を、誰であっても、どのような理由であろうとも、奪うことは許されないと。そう思いました。初めての経験でした。

アジア太平洋戦争において、日本軍は、中国、朝鮮、フィリピン、マレーシアなど、数多くのアジアの国々を武力で侵略し、占領支配をして来ました。日本がアジアの盟主となろうとしたのです。日本を第一に価値あるものとし、そのためには日本以外の他の国はどんなに構わない。それを国粹主義と呼びます。その考えによって、数え切れないほど多くのアジアの人々を犠牲にしました。この国粹主義を打ち破るもの、それこそが、私がトラックの荷台から見たフィリピンの家々の風景でした。明りのもとに営まれている平和を、限りなく尊いものとし、慈しむことです。その平和を奪い、踏みじり、破壊する権利は誰にもありません。ましてや、日本を始めとした諸外国にあらうはずがありません。

この考えに立ってこそ、全ての国と、平和を土台とした関係を築くことが出来ると思うのです。

それでは、今日与えられた御言葉を見て行きたいと思います。

司式者には21節から41節までを読んでもいただきましたが、35節以下の「突風を静める」箇所は、次回の第5章前半の時に一緒に取り上げたいと思います。

始めに21節と22節です。

21：また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。

22：隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。

ある注解書によるのですが、「ともし火」とは、「粘土に油を混ぜた小き」なともし火で、「一室で暮らしていた」家の中を照らす唯一の明りでした。又升は、穀物を量るためのもので、ユダヤの家庭の必需品でした。それは、鉄で出来た燭台の上に置いてこそ部屋の中を明るく照らし出すことが出来、升の下や寝台の下に置く者などいるはずもないと言うのです。ともし火、それは神の国の奥義です。イエス様によってもたらされた神の国の真理です。時に力ある業を通して人々に知らされ、又語られているのですが、今は、まだ人々の目に「隠れている」ように見え、あるいは「秘められ」ているように見える。しかし、必ず「あらわにな」り、「公にな」と言うのです。

だからこそ、23節、

23：聞く耳のある者は聞きなさい。

別の訳では、「もしも聞く耳を持つ者がいるなら、聞くがよい」です。

そして、この注意は、24節前半でも繰り返されます。

24a：また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。

23節と24節の前半で、イエス様は、念を押すように、あるいは厳しく、私の話しをしっかりと聞くようにとっています。そして、24節後半と25節。

24b：あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。

25：持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」

この2節ですが、24節の量るは、裁くと言う意味です。つまり自分が他の人を裁く秤と同じ秤をもって、今度は自分が裁かれることを意味しています。次の「更にたくさん与えられる」ですが、これは肯定的な意味ではなく、神の国の秘義を教えられているあなた方は、教えられているその分だけ、その裁きは増し加わると言うのです。

25節の「持っている人」とは、イエス様の力ある業に触れ、語る言葉を聞き、それによって神の国の奥義を受け入れ、その真理を生きる人は、ますます深く真理に近づくことが出来る。しかし、神の国の奥義を知らされながらそれを受け入れない人は、もはや知る機会す

ら奪われてしまうと言うのです。

そして、26節以降、神の国について、二つの譬を用いて語ります。

まず26節から29節。

26：また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、

27：夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。

28：土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実が出来る。

29：実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

ここでは、神の国を自然の畑の様子に譬えます。

種を蒔く、これは宣教の業と言えらると思ひます。

私共は、一生懸命に御言葉を宣べ伝えます。

そして、ある時に芽が出て、成長し、実を結ばせます。

しかし、28節にあるように、「土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実が出来る」のです。しかし、「どうしてそうなるのか、その人は知らない」のです。つまり、私共は御言葉を宣べ伝えます。しかし、成長させ、実を結ばせて下さるのは、神様です。私共が「夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長」し、「豊かな実が出来」「収穫の時が来」るのです。

何と言う、希望のある、又慰めに満ちた言葉かと思ひます。

神様から託された種を蒔く業を行ひ続ければ、それで良いと言うのです。

その後の一切は、神様がなされる。

神の国は、そのようなものだとイエス様は教えています。

続いて、あと一つ、神の国の譬が語られます。

30：更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。

31：それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、

32：蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

からし種、それは本当に小さなものです。ここに米粒と比較している写真がありますが、米粒 100 分の 1 でしょうか？本当に小さいです。

こちらはカラー写真でクロガラシを紹介しています。この種は香辛料の他油にもなりました。成長すると約 120cm の高さにまでなると言います。もう一方、こちらは黑白写真ですが、4、5m にまで成長した写真が載っています。いずれにしても、米粒の 100 分の 1 しかないからし種が、どんなに大きく成長するか、神の国とはそのようなものだと言っています。

示唆に富む譬です。

ユダヤの中心地であるエルサレムから、遠く離れた、ガリラヤに蒔かれた小さな小さな種であるキリストの福音が、成長し、今や世界の隅々にまで枝を広げたのですから。

からし種、それはイエス様の福音を意味しています。

そして、神の国とは、その福音が全世界に宣べ伝えられ、豊かに実を結んでいることを表しています。

最後の 33、34 節です。

33：イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。

34：たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

イエス様が語られる譬は、人々の日常の生活に密着している事柄を取り上げて語られました。そして、身近にいる弟子たちには、「ひそかに」、これは秘密裡にと言う意味ではなく、他の「自分達だけの時に」の訳の方が正確だと思いますが、イエス様と自分達だけが一緒にいる時に、すべてを説明されたのです。

以上が、今日私たちに与えられた御言葉です。

読 み終えて、今日の箇所から私は 3 つの事を学び得たように思います。

第一に学び得た事は、神の国の秘義、それは主イエス・キリストの十字架と復活の真理とも言えると思いますが、必ず私たちに明らかにされると言うことです。そして、今やすでに明らかにされています。それを信じるかどうか、それだけが問われていることです。

第二に学び得た事は、神の国についてのからし種の譬えです。

私たちの心に蒔かれた小さな御言葉の一つが、成長し、私たちの全てを満たし、人生を慰め、恵みに満ちあふれる力を与えていると言う事実です。

そして、第三に学び得た事は、神の国は、私たちの教会の交わりをも意味している事です。毎主日の礼拝を通して、からし種は蒔かれています。そして、その種は成長し、実を結び、刈り入れの時を待っています。

だがしかし、私たちには、まだそれは隠され、秘められています。

確かに、私たち一人ひとりの心は、慰められ、満たされ、力を与えられています。

あと一息です。

ここに呼び集められた私たち全ての者の心が、一つとなって、神の国の到来を待ち望む時、隠され、秘められていた神の国が、私たちの交わりにその姿を現します。

その時が一日も早く来ることを、そして、何よりも神の国を迎えるに相応しい者となることを、祈りつつ、待ち望みたいと思います。

祈りましょう。